

〔寄 書〕

中尾訓生著『資本主義社会の再生産と人権観念』

晃洋書房, 1993年, ix + 467頁

Michio Nakao, “*The Reproduction of Capitalist Society and the Human Rights*”, Koyo Publisher, 1993.

浦 上 博 達

評者から著者へ (1995年12月19日付)

量が質を呑み込む不安。われわれ現代人が一様に感じているこの不安の正体は、一体何なのだろうか。

本書は、このような不安を社会の経済的構造から見事に解き明かす。質的なるがゆえに意義をもちえたものが、現代の社会では、A商品社会のなかの人々の観念作用によって量的な表現に転形される過程 (量化過程) を論理的に別出してみせるのである。その有様は、著者の言葉をかりるなら、「価値実践と使用価値実践の主体における内的拮抗」(11頁)である。そしてそれは、諸々の人権観念の拮抗として表われることになる。

本書の基調は、現代の社会を資本制再生産過程としてとらえることと、従来のマルクス経済学的接近と一線を画す点であるが、「社会を正当化、根拠づけるという人間の本原的性格」(i頁)の能動性を認めることにある。後者は、「基本関係」と呼ばれ、社会の「構成員を統括している関係」と定義され、本書のキィ・ワードとなる。換言すれば、「諸個人に一定のまとまりを与え、それを持続させているものが基本関係である。」(21頁)ここで評者の関心からして、あらゆる社会形態における社会的物質代謝が充足しなければならない置塩(信雄)の四条件が「一般的抽象労働という観念を成立させている『基本関係』の下で機能している」(2頁, 強調は評者)と述べていることが注目される。本書の基本的なテーゼは、B商品社会においては抽象的人間労働というカテゴリーが (「カテゴリー」という用語が不明であることは後に取り上げる) 質の量化を果たす, ということであるため、抽象的人間労働がどのように存在しているのかが本書の決定的な要諦となる。それについて著者は、C抽象的労働が観念として成立している「基本関係」の存在を想定している。そして引き続いて、社会を支える実践とは、このような「基本関

係」を実践のうちに取り込んでおり、社会的物質代謝に結実していることなのである、と主張するならば（4頁）、論理的にはこの瞬間に量化がおこなわれていることになる。つまり、実践において、抽象的労働の再生産過程に身を投じている実践主体としてのわれわれが、量的な性質をもつ抽象的労働という観念形態で実践するため、その実践形式は量化形式をとり、その結果物としての実践客体である社会的物質代謝（量的でない社会的物質代謝さえも）は量的表現形式をとるのである。このようなもの言いでは、観念が物質に優位するという印象を与えることになるが、著者は、「基本関係」（観念）と社会的物質代謝（物質）の優位性について歴史的に位置づけ、われわれが現代生活している社会は、両者が相互規制的で相互促進的であるような社会であると規定する。しかしながら、評者があえて上述のようなもの言いをしたのは、著者の力点のひとつが、これまで近経・マル経の双方ともに、人間の「社会を正当化、根拠づけるという人間の本源的性格」（i頁）をないがしろにしてきたことへの批判を含んでいるからであり、またそれが、正当化という役割をもつ人権観念の分析に繋がるからである。ちなみに、評者の関心からすれば、こうした人間の性質は意志作用であり、このような作用から形成された観念は形而上的である。著者も、実践者としての人々は、社会的共同体の構成員の一員としての連帯感を得ようとして（この欲求も、人間の本来的な欲求とされている、24頁）、その社会が有している規範を解釈として提示することになると述べる。こうした社会的共同体を紐帯する観念は、その出自は社会的物質代謝の再生産構造のあり方にあるとしても、共同体を紐帯する概念としては形而上的なものとなる。（著者も、C. A. ライクからの引用箇所において意識が世界観であることを支持し、そのもつ虚構的性格にさえ支持をあたえているようにみえる、41頁）。人権観念とは、こうした人々の共同体の（正当化の）観念であり、現代の社会は、商品過程から形成された諸人権観念と非商品領域（評者の用語）に存在する諸人権観念とが攻めぎ合っており、前者による後者の取り込みに対する怖れが、量が質を呑み込む不安感なのである。

本書の第1章において、社会の維持・存続は、社会的物質代謝および「基本関係」の再生産によって可能であるとして、この両者が価値循環の視点から解明される。ここで、著者の主張の足場となる「労働の二重性」が取り扱われ、価値実践と使用価値実践が腑分けされる。著者はカテゴリーとしての視点から、宇野（弘蔵）・滝沢（克巳）・伊東（誠）に批判を加えて、抽象的労働は資本制社会に特有な歴史的なものと結論づける。（この点に関して著者は置塩を支持するが、厳密に検討するならば上述の「あらゆる社会形態における」と齟齬をきたすのではなかろうか。）このことは、量化過程が資本制社会に固有なものであることを意味しよう。（しかしながら、観念としての「量化過程」は、資本制以前にもガリレオ、デカルト、ベーコンなどにみられるように近代的精神として現われた。）そして、著者は、使用価値実践こそが人間の本質であるという主張をここに忍ばせる（11頁）。ここで気になる点の一つは、社会的物質代謝と「基本関係」の

相互規制の関係がマルクスの物的依存の社会形態であるというが(2頁),^E「物的依存関係」とは、社会的物質代謝によって「基本関係」が規制されている状態なのではないであろうか。

第2章においては、「基本関係」がエートス的性格を備えていることが、マルクス、ヴェーバー、ライクの論述を検討することによって示され、補論で、ポランニー、マリノフスキー、レヴィ＝ストロースに言及する。ここでの結論は、「基本関係」はエートスが体化されたものである(31頁)ということである。これが「解釈の枠組」と呼ばれる。そして社会は、それ自身をいかに解釈するかといういくつかの「解釈の枠組」を備えており、人々はこれらのなかから自己の実践を解釈するのに適当と思われるものを使用するとされている。このような「解釈の枠組」は歴史的なものであり、「長い時間経過の中で生き残った社会的に好ましい表現が解釈枠組を構成しているのである。」(40頁)とされているが、「解釈枠組」が生き残る、とは、社会が読える、ことを意味する。というのも、資本制社会では、「基本関係」と社会的物質代謝は相互的な依存・促進的關係を有しており、社会的物質代謝の再生産によって「基本関係」は維持されており、基本関係の維持は社会的物質代謝の再生産になっているからである(56頁)。

第3章においては、労働力商品としての実践と商品交換の実践を「価値実践」と定義し、商品社会においてはこの価値実践が、全生産物を量化しつつその量の増大をめざす構造が解明される。このような対象の量化(価値化:その最高の表現形態は貨幣である)は、経済的生産の領域を超えて人間の態度(社会的性格)にまで及ぶ。つまり、商品経済(量化)のなかで人間が再生産されることによって、人間は主体的にも量化に対して手をかすことになるのである。これが商品経済の「基本関係」なのである。

第4章においては、経済解釈と経済カテゴリーの形成が述べられるが、ここでは、マルクスが「商品に表示された労働の二重性」を取り上げながらも、「表示された」ということの意味に対するマルクスの検討が不徹底であるとしてその考察を始める。「『表示される』ということは、モノ(=商品)を価値的に、あるいは使用価値的に取り扱っているということ、つまりモノに価値実践者としてあるいは使用価値実践者として働きかけているということである。」(108頁)つまり、「表示されている」ということは、「解釈されている(=意味を付与されている)」ということである。マルクスはそのことに気づいていながらも、人間がモノ(=商品)をカテゴリー(=価値というカテゴリーと使用価値というカテゴリー)として認識する認識方法の二つの範式(=価値範式と使用価値範式)を見逃しているとするのである。つまり、商品に二重の労働が存在するのではなく、商品の認識(=商品の意味)に二重のカテゴリーがあり、そのカテゴリーを得るために二重の認識方法があるのである。とすれば、労働の二重性は、商品に存在するのではなく、われわれに、つまり「基本関係」に存在することになる。ここで注意を要するのは、同じ名称をもつカテゴリーと範式が対応するのではなく、その対応関係が四通りある(108頁)ことであ

る。そして、これらすべての組み合わせは、解釈者の価値観と社会の価値観との組み合わせとに置換できるかのような叙述がでてくる（127頁）が、社会の価値観とはどのようなことなのか。社会の価値観はカテゴリーと呼ばれているものなのか。カテゴリーとは一体何のことであるか。それは、モノにあるのか、人間にあるのか。マルクスにあっては、カテゴリーという用語は明瞭なのであろうか。（ちなみに、評者は、「カテゴリー」を思惟の論理的形式＝範式と解釈している。）カテゴリーという用語は、本書の主張において重要な役割を演じるにもかかわらずその用いられ方については不透明感が残るが、ひとまず先に進もう。人がどちらの範式を採用するかについて、レヴィ＝ストロースを批判しながら、「どちらの範式を選択するかは意識的である」（132頁）と述べ、新石器時代は使用価値カテゴリーを使用価値範式で解釈するのが一般的であり、近代では価値カテゴリーを価値範式で解釈するのが一般的である、とする。ここに本書の主張が端的に示されている。つまり、質の量化とは価値範式で使用価値カテゴリーを解釈することである。

第5章においては、「解釈」を通じて連帯を求める性向は人間にとって本源的である（139頁）としたうえで、「解釈」の対象としての主体の実践とそれを表現している表現体（例えば、「趣味がテニスである」など）、そしてその一組みの系列である表現体系が「解釈」との関係で取り扱われる。ここで「解釈」に関連して、「価値実践の場における『解釈』は『乖離』を隠蔽するものであったが、生活世界領域における『解釈』はそれぞれの生活世界の確認である。」（155頁）と述べられる。

環境問題をめぐるここでの議論は、鳥越（皓之）の主張する生活環境主義が批判され、「カチカチの保護派」が擁護される（171頁）。この立場は、本書の最終的な「カチカチの」人権思想の擁護と繋がることになる。

第6章においては、「基本関係」の論理的な設定がマルクスの価値形態論からなされ、次の主張が引き出される。諸商品を交通可能にする一つの意味体系を設定することが基本関係の設定ということであり、その一つの意味体系というのは価値体系のことである。そして価値体系というのはすべてのものを無差別一様な量に翻訳してしまう抽象世界のことである（200頁）、と。このことは、「無差別一様な量に翻訳してしまう」観念（量化の観念）の世界が存在するということである。

第7章においては、「社会的に受容されたところの解釈された表現体系」（238頁）として制度が分析の対象とされる。「制度」の構成要素は、表現体であり、その正当化は「解釈」によってなされ、実践のパタン化、ルーティン化が「制度」を介して形成される（231頁）ことが論述される。そして憲法制度は、ルーティン化した諸制度に存在根拠を与える社会的規範として提示されるが、この社会的規範は商品交換の構成的解釈によって取り込まれているのである（254頁）。

補論で、ポパーに対する批判がなされる。ポパーは、マルクスを『資本論』体系のなかで位置づけることなく、「マルクスを予言者として位置づけようと努力している。」(267頁)のである。ひきつづき、ポパーの制度論を継承する平井(宣雄)の制度論を批判し、その根本的な誤りは、「制度設計図」を提供せんとしている者が自分自身を価値判断から独立していると思いついでいることにあるとする。平井の法制度一般は、希少性の原理に基づいており、「合理的経済人の世界では、資本循環の円滑化 = 効率の重視 = 正義という観念が容易に一般化していく」(270頁)のであり、平井はそのような観念のなかにいるのである。

第8章においては、生活世界が主役として登場する。生活世界とは、「生きがい」を見いだす世界である。人は、いろいろな眼鏡(さまざまなカテゴリー、イメージ)のつまった「道具箱」のなかから適当に眼鏡を選び出して「価値世界」や「生活世界」を造り出すというのである(279頁)。生活世界の一つの具体例として家庭が、価値世界のそれとして職場があげられているが(5節)、これらは、文脈からすれば、掛けた眼鏡によって人々が造り出したものということになる。つまり、これらの「場」は、われわれの頭のなかで構成されたものなのである。

第9章においては、「経済システムは抽象的、量的関係(価値関係)の下にあり、生活領域は本来、具体的、個別的な人格依存の関係の下にあるという」(305頁)ことを基軸にして、経済システムが生活領域を取り込んでいく過程を、イメージを分析することによって捉え、そこに広告の果たす役割をみる。広告とは、生活領域からのイメージを経済システムのなかで加工し、その加工されたイメージを生活領域に発信するのである。このようなやり取りを通じて、「生産過程で生み出された無味乾燥な秩序の体系が消費の場では極めて人間的な意味を有する象徴体系に転化する。」(341頁)ことになり、「両体系を車の両輪とすることで生産(価値循環)と消費(生活領域)が結合されている。」(341頁)のである。

第10章においては、環境問題が論じられる。価値循環と環境保護の両立が困難であることが示され、その解決として、「すなわち、…(生活領域)A-G-W(生活領域)A-G-W…の循環をG-W-G'の価値循環から自立させること、価値循環に組み込まれない生活様式を確立することである。」(365頁)ということが主張される。このことは、生活領域での労働力の再生産過程を価値循環から独立させるということなのであろうか。そしてこのようなことによって、「大気汚染」・「森林の伐採」・「海洋の汚染」が防止されるのであろうか。

第11章においては、本書のタイトルが示す主題が展開される。ここでの問題は、「価値実践の表現体系を人権の諸規範はどこまで包摂することができるか、人権の諸規範が有効に価値実践の相互作用を働かせる射程限度はどこまでなのかということである。」(369-70頁)まず、人権の法的擁護者としての「国家は基本的制度を価値循環の拡大に適合させるよう行動しているのである。」(380頁)ここで、近代自然法思想家として、ホッブス、ロック、そしてルソーを取

り上げ、彼らの共通項は国家を規範的に構成していることであるということを描する。またスミスの「同感」論には、共通の価値（共通感覚）の存在を前提条件とすることが欠落していると批判する。一方、高島（善哉）の指摘にそって、マルクスの貨幣を導出する論理をルソーの国家を導出する論理と相似させ、国家を規範的でなく、貨幣と同じように諸個人を交通可能にさせる共通基盤として位置づける。

少し長いが、本書の最終的な主張を引用しておこう。

「人権観念は人々が自己の実践を根拠づけ、正当化するときに提示している諸解釈の背景をなしている。人権観念がこのような役割を果たし、しかも日々再生しているのは商品交換によって、これが取り込まれているからである。すなわち、これは商品交換の規範的構成として再生しているのである。したがって、人権観念の中味は全体としての商品交換によって規制されているのである。」(391頁)

著者は、ここでマルクスのプルードン批判を取り上げた後、「意思関係が価値関係の形成・維持に果たしている役割を見落とすと、「私が注目しているマルクスの論理を切り捨てることになってしまう。」(392頁)と述べる。そして、川島（武宣）の「意思関係の内容は経済的関係そのものによって与えられる」(392頁)という視点を批判する。それにつづく、ハイエクの正義論の検討において、「ハイエクの正義論は市場秩序の維持に貢献するイデオロギーとしての役割を果たしている」(396頁)とする。ハイエクは、諸個人に貫徹している社会的なるもの（全体秩序が依拠している価値）を無視しており、しかもこのこと（価値）をいかにして社会認識者としてのハイエク自身が認識できるかという問題に彼は気づいていないのである。この問題については、マルクスは「商品に語らせる」ことによって解決しているという（第6章）が、これは、研究者が、彼自身が用いる言葉が歴史的である、ということを実覚することであろう。つまり、超歴史的言語を、社会の内側に存在する社会研究者は使用することができないため、その社会ですでに使用されている言葉で語らせるということであろうか。要は、研究者が用いる言葉自体がその社会の表現体系（価値観）のなかに含まれているということである。この主張は支持できるが、だからといって「商品に語らせる」ことで解決したことになるのであろうか。

最後の章である第12章においては、人権観念の二面性が分析される。人権観念とは、社会的物質代謝と基本関係が商品交換を介して相互に作用する社会で、不特定の他者に対して自己の実践を正当なものとして主張するときに依拠する観念とされる（411頁）。この人権観念は、実践の二面性から生ずる二面性をもつ。つまり、「価値実践を正当化するための解釈が依拠する人権観念は商品交換の規範的構成に取り込まれたそれであり、価値実践を批判するための解釈が依拠する人権諸規範はこの規範的構成に取り込まれない内容をもったそれであるということである。」(411-12頁)そしてこの「規範的構成」が積極的に、そして対立的にではなく、人権の諸規範を

取り込むのである(417頁)。これと近接した分析として、C. B. マクファーソンの「資本主義的市場社会を律している関係を弱め、自由民主主義的価値を尊重することで自由民主主義は生き残れる」(419頁)という主張を支持する。つまり「参加民主主義は使用価値実践によってのみ実効的になる」(426頁)のである。このことは、下山(瑛二)の、「人権規範体系」は資本主義を根拠づけ、資本の行動を正当化する枠組であるという主張を支持することにもなる(3節)。国家もすでに積極的に商品交換の規範的構成に手をかすことになった現在、商品交換の規範的構成に包摂されない「カチカチの」人権規範が求められる。それには、村上(泰亮)のように公害をマイナスの公共財(457頁)とみなすような仕方では解決しないであろう、という著者の批判には評者も賛成である。というのも、その用語自体が市場経済の用語であるからである。そのような解決は、商品経済の侵蝕から生じた問題を商品経済で解決しようとするものである。ここから商品交換の規範的構成に包摂されない「カチカチの環境権」(評者の用語)という観念が必要となる。このような観念が、商品経済そのものから創出されることは本来の解決にならないし、また、本来、望むべくもない。ここまでは、評者も本書に従うとしても、本書が「市民社会の健全なる発展は価値実践と使用価値実践とのバランスによってのみ保障されるので」(強調は評者)あり、「価値実践の行き過ぎを抑制することである。」(462頁)と主張するのは、元々、本書の用語を用いると「価値実践」と「使用価値実践」の対立を想定しているからではないであろうか。むしろ、「使用価値実践」の枠内で「価値実践」をおこなうということができないのであろうか。つまり、「社会的に絶対的なものとして確立された人権の枠内で、市場経済が機能するということは果たして不可能なのであろうか。」このようなもの言いは、評者自身が商品社会に存在するという自覚に欠けるからであらうか。しかし本書の基本的なテーゼのひとつである、人々の社会的な観念が社会に与える積極的な影響を認めて、「社会的雰囲気(=基本関係)を助長させること」(462頁、括弧は評者)ができるならば、経済学は、それが忘れかけている社会的役割のひとつ(社会的啓蒙)を果たすことが求められているのではなかろうか。経済学研究自体が量化されている現代、本書はまさにそのようなことに応えるものである。

以上

著者から評者へ(1996年3月20日付)

上記の各下線部について注釈します。

- A. 商品社会のなかの人々の観念作用によって量的な表現に転形される過程 ⇒ 商品社会が人々に強要する実践(価値実践)によって質的なものが量化される過程、とするほうが適切

です。

次の点が説明されなければならない。それは、強要された実践を積極的にか、消極的にか、受容する構造である。というのも、人々は強要されていると感じていないのであるから。人々は、商品社会に順応するためには価値実践（労働力の商品化）をしなければならず、価値実践を受容すると、人々は価値実践を正当化するのである。そして正当化するとは、自己の実践を社会的に意義づけ、他者に認めてもらうということであり、これは人間の本源的な性格に由来する。このために自己の実践を解釈して他者に提示するのである。

B. 商品社会においては抽象的・人間労働というカテゴリーが質の量化を果たす

カテゴリーが質の量化を果たすとは、質的なものを量的に把握するということである。

私は「実践（労働）」と「実践の解釈」とは不可分一体であると考えている。そしてこれは、（蜜蜂の巣づくりと人間労働の違いについての）マルクスの「労働」理解に依っている。

また、「貨幣の発生」と「貨幣カテゴリーの発生」を明らかにするためには違う方法によらなければならない。前者は歴史的方法によるし、後者はそのカテゴリーが当の社会においていかなる位置にあるかを明らかにするということである。例えば歴史的には地代は利潤に先行するカテゴリーであるが、資本主義社会では利潤カテゴリーが明らかになって後、地代は説明される。マルクスの「価値形態論」は貨幣の発生ではなく、貨幣カテゴリーの発生を説明しているのである。

カテゴリーについては、次のように述べるができる。私たちが対象を把握するとき、私たちは私たちにとって所与である言語（言葉）を無意識的に使用して対象を理解し説明するが、論理的に説明しようとするときは、言語内容を整理しなければならなくなる。ここにカテゴリーが必要となってくる。近代市民社会（商品社会）では他者を説得する解釈は論理的でなければならない。「論理」こそが権威である。論理の性格については、図で説明しているように四通り存在している。

「資本は労働手段である。」「労働手段は資本である。」

この文の違いはその人がいかなる実践（価値実践かそれとも使用価値実践か）をしているかに依って説明できる。価値実践（経済的実践）では対象の質を捨象して量的にのみ把握するのである。そして、価値実践を表現しているモノは価値実践者にはその属性は捨象されている。そのモノの区別は量的差異のみである。例えば、価値実践者にとってラーメンと自動車の区別はその使用価値ではなく、価格によってのみ与えられているのである。

また、価値実践者が自己の実践を正当化するとき、彼はそのモノの使用価値的属性に注目する。そして、自己の実践の社会的意義は実践を表現しているモノの社会的使用価値によって与え

られているのである。ここに価値実践と価値実践を正当化する解釈との間に乖離が生じており、正当化の解釈のイデオロギー性（あるいは虚構性）とはこの乖離度から判定されることになる。

C. 抽象的労働が観念として成立している「基本関係」の存在を想定している

基本関係は{価値実践, 価値実践の表現体系, 解釈枠組}と規定しているように、基本関係は観念として成立しているのではない。

D. 量的な性質をもつ抽象的労働という観念形態で実践するため、その実践形式は量化形式をとり、その結果物としての実践客体である社会的物質代謝（量的でない社会的物質代謝さえも）は量的表現形式をとるのである

人間は労働をするとき、頭の中には労働のプログラム（観念）を持っている（マルクス）。私は労働と観念を分離していない。だから基本関係を{実践, 表現体, 解釈}と定義したのである。

E. 「物的依存関係」とは、社会的物質代謝によって「基本関係」が規制されている状態なのではないであろうか

物的依存関係とは貨幣によって媒介された量的関係のことである。{基本関係←商品交換→社会的物質代謝}であるから、基本関係と社会的物代謝は商品交換によって一体化している。労働力が商品化した社会（資本主義社会）では{基本関係←流通→社会的物質代謝}である。これは商品交換（流通）によって財の生産・分配・消費は遂行され、正当化の解釈枠組も商品交換を通じて日々、維持・再生産されているということである。

F. 社会の価値観とはどのようなことなのか

これは文化、風土によって歴史的に形成されてきているのであるが、資本主義社会はこれを積極的に取り込み、変容させている。社会の価値観に反するような解釈は正当化されない。資本主義の価値観は「自由」「平等」である。その内容は様々であるが商品交換によってその理念は維持・再生しているのである。日本資本主義の特性とアメリカ資本主義の特性は違うが、共通する価値観は商品経済によって形成されている。

G. 質の量化とは価値範式で使用価値カテゴリーを解釈することである

価値カテゴリーを価値範式か、使用範式で解釈することであり、解釈されるカテゴリー（主語）は実践の性格によって与えられている。質の量化とは価値実践者の対象把握、対象への働き

かけのことである。価値実践者が対象の具体的属性を捨象して量に還元してしまうのである。例えば、深山幽谷を眼前にして、価値実践者はこれがどれだけの利潤を生むのかと費用計算し（対象の量化）、使用価値実践者はその具体的属性に注目する。

H. これらは、文脈からすれば、掛けた眼鏡によって人々が造り出したものということになる。つまり、これらの「場」は、われわれの頭のなかで構成されたものなのである

どのような眼鏡をかけているかについては価値実践者は意識していない。価値実践者はその社会に適応している眼鏡を、その社会の常識を身につけることができるような眼鏡をかけている。というのは、価値実践は商品社会を支えている実践であるからである。

したがって、これらの「場」は本来、価値実践の「場」ではなく、実践によって規定されている。生活の「場」は本来、価値実践の「場」ではないから、夫や妻、母や子は価値実践をチェックするような眼鏡をかけている。つまり「生活の場」を抽象的な無差別一様な量的世界と解釈するような眼鏡をかけていない。ところで、「社会の解釈」としては、何を、どのように解釈するかというとき、「何」（解釈対象）は実践によって与えられている。「どのように」は採用した範式によって規定されている。

I. 意思関係が価値関係の形成・維持に果たしている役割

正当化の解釈を互いにやりとりする関係（意思関係）は量的関係（価値関係）を温存し、量的関係の冷たさを隠蔽する。意思関係は経済的關係と切り離すことはできないが、自立の存在領域を持っている。

J. 社会的に絶対的なものとして確立された人権の枠内で、市場経済が機能するということは果たして不可能なのであろうか

「環境権」を基本的人権に加えるべきという要求があるが、「環境権」は市場経済と対立するものであるから（459頁）容易に認められない。もし、基本的人権としての「環境権」が容認されるならば市場経済は質的な変化をもたらすことになるであろう。というのも、「環境権」は商品交換の規範的構成に包摂されないからである。重要な点は、資本主義社会は変質しているということであり、この変質を決定するものが、拡大・深化している価値実践をチェックする使用価値実践の存在であるということである。

ところで、私は基本的人権としての「環境権」の設定はこの変質を決定的にすると考えています。そして「環境権」は人間の本源的欲求に基づくものであると考えているから、今や、商品経済の矛盾（マルクス経済学の好きな用語）の集中的表現である環境権を克服するために「環境

権」への要求は絶えず出されていくであろう。

本書の特徴は、資本主義経済の運動それ自体、その方向を把握するために主体の二重性から分析をしている点である。すなわち、資本家階級と労働者階級という古典的な階級闘争図式ではなく、労働（使用価値実践）者の内にも資本家的欲求、資本家的行動（価値実践）の存在（主体の二重性）を認めているのである。

（追記：マルクスを専門に研究されていないアナタが、本書を読むことは多くの努力を要したことであろうと思います。しかも、このような書評をいただき、大変感謝しています。

私は、マルクス研究者でない方に本書を読んでもらいたいと思っています。というのは、そのような方のほうが、私の問題意識を直接つかんでくれると思うからです。）

以上

評者から著者へ（1996年4月13日付）

（ご返事を頂いてから長い時間が過ぎました。その間、何度かご返事の内容を反芻しておりましたが、再度お考えを伺いたいと思います。）

本来は、書評的なスタイルからしてお尋ねしなくてはならないことが多々あるかとは思いますが、焦点が散逸したり冗漫になることを恐れ、以下では、本書の基本的概念である「基本関係」と焦眉の問題となっている「環境権」についてのみお尋ねいたします。

私の解釈によれば、「基本関係」とは、物質界（客体）の構造である「社会的物質代謝」に対比した、人間界（主体）の構造のことである。このように、主体の構造を強調する理由は、社会の再生産をたんに社会的物質代謝過程としてとらえるのではなく、基本関係、すなわち人間的行為 = 実践 + 表現体 + 解釈、を含めたものとしてとらえるのであり、そうすることによって、「社会そのものの再生産」における基本関係の果たす役割を抽出できるであろう。

こうした視点で現在の社会をとらえるならば、社会的物質代謝過程としてのひとつの歴史的な在り方である資本主義社会の基本関係は、実践が「価値実践」ということにあり、その「価値実践」とは「商品交換という実践」であり、それは「量化するという実践」なのである。そして、この「量化するという実践」は、人間の本源的な欲求である「正当化」という解釈作用によって正当化され、またこのような正当化によって資本主義社会そのものが再生産されているのである。

もしこのような理解に誤りが無いとするならば、次のように一般化できるでしょう。

社会的な次元（ここに歴史性が含まれる）での物質代謝の在り方が、人間の行動をある特定の

方向に強要し、その方向が、人間の観念の次元における「正当化」という人間の本源的な欲求にしたがって正当化される。そしてこの正当化された観念は、その方向を強化するばかりでなく、その方向になかったものさえも取り込もうとする。しかしながら、これに取り込まれないものも存在し、それによって社会的物質代謝の在り方は、その歴史的な変容が迫られる。

私自身、観念がモノからいかなる作用を受け、そしてその観念がモノにいかなる作用をあたえるのか、ということについて関心をもっています。こうしたバイアスがあるため、重要な点を見逃したり、それ以上に誤解がないかを恐れています。このような私の関心とあわせて、以下の本書の基本となるいくつかの点をお尋ねいたします。

問1. お答え(D)に、基本関係{実践, 表現体, 解釈}とありますが、それらは括弧で括られるよりも、むしろそれぞれの各要素の関係こそが分析される必要があるのではないのでしょうか。

問2. (イ)「社会的物質代謝過程」と「基本関係」の相互関係はどのようになっているのでしょうか。

(ロ)「生活世界」は、この「社会的物質代謝過程」に含まれているのでしょうか。

(ハ)「生活世界」では、基本関係は{使用価値実践, 使用価値実践の表現体, 使用価値的解釈}ということになるのでしょうか。

(ニ) このように考えてくると、本書のテーゼは、「社会的物質代謝過程」を「商品社会(交換)」と読み換え、「商品交換」を「価値実践」と読み換え、「価値実践」を「価値実践の表現体系」と読み換え、「価値実践の表現体系」を「価値実践的解釈の枠組」と読み換え、「価値実践的解釈の枠組」を「社会的物質代謝過程」と読み換える、というトートロジー的な論法になっているのではないのでしょうか(ここでのトートロジーが真にトートロジーになっているかどうかという疑問は残りますが、この論法自体が批判されるわけではありません。というのも、私はトートロジーこそが論理的叙述であると考えているからです)。特に最後の読み換えにおいては、質的なモノも含まれている「社会的物質代謝過程」を「価値実践的解釈の枠組」(=「量化」という解釈の枠組)に読み換えているのではないのでしょうか。このことが、質的なモノ(使用価値, そしてそれは人権に繋がる)を量化する(その究極は、貨幣という表現形式をとる)という本書の主張となっているのではないのでしょうか。

問3. (イ)「環境権」は、「生活世界」という現代の「社会の再生産」のいまひとつの在り方としての社会的物質代謝過程(例えば、家庭)から使用価値実践を通じて生成されたものですか。お答えでは、「『環境権』は人間の本源的欲求に基づくものである」(J)とされています。

- (ロ) 「環境権」は、「基本関係」とどのような関係をもっているのでしょうか。
- (ハ) 「重要な点は、資本主義社会は変質しているということ」(J) と述べられています。資本主義は、(a)何によって、(b)どのように変質しているのでしょうか。そして、(c)環境問題はその変質にどのように関与しているのでしょうか。もし『環境権』は人間の本源的欲求に基づくものであり、それが市場経済の変質に決定的な要因であるとするならば、「人間の本源的な欲求」なるものは、社会構造の決定的な要因であるとみなしてよいのでしょうか。

最後に、ひとつだけ私の立場への批判をお教えてください。

私は、経済学研究の認識論において、研究者の価値をその基本的な性質とする認識論的な概念(私の用語法では「形而上概念」です)が、論理的作業および実践的作業に及ぼす作用を調べています。そしてこのような概念が我々の研究作業に大きな影響を与えていることを主張しています。本書もこのような問題意識で読み進みました。その点からすれば、マルクス経済学者ではない私にとっては、「商品経済」から抽出され、そしてふたたび「商品経済」に投げ返された、「量化」の原点である)「抽象的人間労働カテゴリー」こそまさに典型的にそのような概念であろうかと考えております。『抽象的人間労働』とは、経済学研究における形而上的な性質をもった概念であるという私の主張には、「マルクス経済学者」としてどのような批判がなされるのでしょうか。

以上

著者から評者へ (1996年4月22日付)

「私の解釈によれば……その歴史的な変容が迫られる。」という要約は要点をついています。

返 答

1. 基本関係の内容を豊かにしていくためには当然、基本関係を構成している各要素およびこれらの関連を明らかにしていかなければなりません。
- 2.(イ) 「社会的物質代謝過程」とは経済一般ということであり、超歴史のカテゴリーです。基本関係は当該社会を歴史的に特定する論理カテゴリーですから、両カテゴリーによって経済一般を特定社会の経済として明らかにするというのが私の狙いです。

非資本主義経済においては「社会的物質代謝過程」は「基本関係」によって規制されている。資本主義経済においては両者は商品交換(市場)によって不可分一体となっている。

したがって、市場経済を分析するためには生産の一要素としての主体（合理的経済人）を想定するだけでは不十分である。基本関係に規制されていながら、しかも新たな基本関係を構築していく主体（使用価値実践者）を考察しなければならない。市場経済は市場経済を担う主体（価値実践者）を再生産しているのである。

他方、市場経済がどれほど発展しようとも人間の本性性を消失させることはできない。疎外の認識は価値実践を批判する使用価値実践を求める。

- (ロ) 生活世界はアイデンティティを感得する場であるから、彼、彼女は一般的に経済過程の外で、家庭やクラブでアイデンティティの感得を求める。市場経済の下では労働は苦痛であり、彼、彼女が自由を感じるのは労働現場を離れたときというマルクスの見解を受けられています。
- (イ) 市場経済を支えている実践は価値実践であるから、使用価値実践が支配的であると想定することはできません。市場経済の下で彼、彼女はいかにしてアイデンティティを感得するのであろうか。価値実践者としての彼、彼女は空想の世界、虚構の世界を構想し、アイデンティティを感得する。即ち彼、彼女は自己の世界を使用価値的に解釈するのです。このとき、解釈の素材が市場経済によってあたえられたものであるのか、非市場的なものであるのか、によって彼、彼女の生活は決定的に違うでしょう。前者の場合、生活世界はますます実態とかけ離れた空想的なものとなる。後者の場合、使用価値実践者としてのライフ・スタイルをとっていくであろう。

かかる意味において彼、彼女の「生活世界」は、「使用価値実践、使用価値実践の表現体、使用価値的解釈」ということになる。基本関係は社会を統括する関係のことですから、市場経済を想定すれば、基本関係を上述のようにいうことはできません。ただし、彼、彼女は市場経済と隔絶した生活をすることは不可能であるから、あくまでかかるライフ・スタイルを志向しているということです。

- (ニ) 「社会的物質代謝」を「商品社会（交換）」と読みかえることはできません。「社会的物質代謝」は超歴史のカテゴリーであるのに対して「商品社会」は歴史のカテゴリーです。商品交換行為は価値実践に含まれますから、商品交換行為を価値実践と読むことはできません。価値実践と価値実践の表現体は同じではありません。価値実践には価値実践の表現体が対応します。価値実践の相互作用に価値実践の表現体が対応しています。人は私を理解するために私の表現体を解釈します。私の表現体は私の友人たちであり、私がつき合っている人たちであり、私の家具であり、私の読む本であり、私の衣服であり、その他、私が関係している人たち、諸々の物です。これらの表現体はおそらく私自身によっても意識されていないでしょうが、「私」を中心にして統一的に意味を付与されているでしょう。

したがって、これらのものは「私」の表現体系ということになります。私が解釈することとはこの表現体を読みとることです。「私」個々の表現体ではないが、「私」が何であるかは「表現体系」を読み取る以外には方法はないでしょう。さて、私の友人は私を解釈するとき表現体系の一部分を解釈しています。私の母親も私を解釈するとき、表現体系の一部分を解釈しています。解釈枠組とはこれら諸々の解釈に共通しているところのものです。

「価値実践の相互作用の表現体系」の各部分を通常、経済学者は自己の立場から解釈するわけです。注意すべきはこれら部分解釈を寄せ集めても資本主義経済の全体を浮かび上がらせることはできないということです。

表現体系に位置づけられた諸用語を読み取ること、換言するとこれら諸用語に意味を付与することが資本主義経済を解釈するということです。ブルジョア経済学批判とはブルジョア経済学者が使っている用語（カテゴリー）を表現体系に位置づけることです。彼らの例えば、商品、貨幣、資本……という用語を表現体系に位置づけるとき、これら用語は（マルクスにとって）カテゴリーになります。

ブルジョア経済学批判は資本主義の運動法則の解明でもあるというマルクスの主張は価値実践の相互作用（＝資本主義経済）と価値実践の表現体系の対応から引き出されています。

3.(イ) 環境権はわが国においては認められていません。環境権が基本的人権の一つとして認められるならば、市場（資本主義）経済は変質するでしょう。市場経済ではなく、新たな経済形態になるかもしれません。環境権を求める要求は価値実践者からは生じません。それは使用価値実践者の要求です。

(ロ) 市場経済の基本関係 = {価値実践の相互作用, その表現体系, 解釈枠組} は、環境権が基本的人権の一つとして容認されるならば変質します。つまり価値実践が抑制され、使用価値実践が社会的に承認された場所を占めることになるからです。

(ハ) 資本の論理によるこれまでの経済開発は抑制されることになります。ということはエネルギー過消費、ゴミをたくさん出す豊かな生活を保障する経済は困難になります。したがって私たち自身のライフ・スタイルも変えざるを得ません。

環境権が容認されるということは私たち自身の環境に対する考え方が変わらざるを得ないということ、あるいは変わっているということです。

生態系（自然環境）はそれを構成している各要素の具体的属性によって成り立っています。空間も時間も生態系によって与えられています。資本は空間を私有財産によって線引きし、時間は資本の維持によって決定します。

資本主義社会を超える社会形態は従来の革命とは異なり意識的に創造されなければならぬという意味から, すなわち人間は滅亡を避ける行動をとらざるを得ないかあるいはとるであろうという意味から, 「人間の本源的欲求」は資本主義社会構造の決定的要因となっているといたい。

最後の質問について

1. 社会認識の作業にとりかかるとき, 研究者は自己の価値観がどのようなものであるかを認識することが必要であろう。
2. 「抽象的人間労働 (価値実践)」と「具体的労働 (使用価値実践)」を拮抗させている主体が認識主体であり, またこの主体が資本主義社会の人間であると考えています。したがって上述の意味で実践の二重性は認識の用具でもある。そして実践の二重性は, マルクスが先行者の経済的諸論述を整理・統合することによって獲得したものである。

「抽象的人間労働 (と「具体的労働」) は経済学研究における形而上的な性質をもった概念である」ということについては, 私は反対ではありません。ただし, 労働の二重性は形而上的性質だけに限定されません。労働の二重性を資本主義社会の人間は有しているということです。

以上